

令和7年度 第32回
静岡県図書館大会
兼 令和7年度
全国公共図書館研究集会
記録集

期日：令和7年12月1日（月）

会場：静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ

静岡県教育委員会
静岡県図書館協会
静岡県読書推進運動協議会
静岡県読み聞かせネットワーク
公益社団法人日本図書館協会
関東地区公共図書館協議会

目 次

1	令和7年度 静岡県図書館大会要項	1
2	表彰	3
3	講演会・分科会概要	6
	(1) 講演会	
	「公立図書館と新刊書籍市場の曖昧な関係：図書館の蔵書傾向および書店支援」	
	講師：大場 博幸氏（日本大学文理学部教授）	
	(2) 分科会	
	第1分科会 図書館サービス①	
	「みんなの図書館とまちづくり」 ※資料なし	
	講師：土肥 潤也氏（みんなの図書館さんかく館長）	
	第2分科会 図書館サービス②	
	「誰もが楽しめる電子図書館 ～将来性と活用のヒント～」	
	講師：家禰 淳一氏（愛知大学文学部人文社会学科教授）	
	第3分科会 子どもの読書活動	
	「へなそうるの森から くらしと物語」 ※資料なし	
	講師：渡辺 鉄太氏（児童文学者・翻訳家）	
	第4分科会 学校図書館	
	「POP王に学ぶ！学校図書館で活かすPOPの力」	
	講師：内田 剛氏（ブックジャーナリスト）	
	第5分科会 大学図書館	
	「図書館と展示～企画展示が導く知識との出会い～」	
	講師：河合 郁子氏（東京都足立区 図書館サービスデザイン担当課長）	
	的場 ひろし氏（静岡文化芸術大学デザイン学部デザイン学科教授）	
	第6分科会 全国公共図書館研究集会	
	・事例報告「静岡書店大賞：静岡県の読書推進に向けて」	
	講師：河口 雅哉氏（第12回静岡書店大賞事務局長）	
	・調査報告「人口減少社会における図書館と地域の関係性とこれからのあり方」 ※資料なし	
	講師：大谷 康晴氏（青山学院大学 コミュニティ人間科学部コミュニティ人間科学科教授）	
	・研究協議 ※資料なし	
	司会・コーディネーター 大場 博幸氏	
	登壇者 河口 雅哉氏・大谷 康晴氏・高橋 健二氏（静岡県立中央図書館館長）	
	・情勢報告 ※資料なし	
	植松 貞夫氏（公益社団法人日本図書館協会理事長）	
4	その他	50

令和7年度 第32回 静岡県図書館大会要項

- 1 **趣 旨** 県内の図書館関係者及び各地で読書活動に携わる人を始め、広く図書館に関心を持っている人々が集まり、生涯学習の拠点として、図書館が地域住民の学習・文化活動において果たすべき役割やその可能性を探る。
さらに、読書活動の一層の推進を目指して研修し、参加者相互の交流を深めることにより、「読書県しずおか」を全国に情報発信する。
- 2 **対 象** 図書館・公民館図書室・学校図書館関係者、教育委員会関係者、図書館協議会委員、社会教育委員、公民館運営審議会委員、読書会・文庫関係者、図書館ボランティア、読み聞かせボランティア、図書館利用者、図書館・読書活動に関心のある人
- 3 **主 催** 静岡県教育委員会、静岡県図書館協会、静岡県読書推進運動協議会、静岡県読み聞かせネットワーク、日本図書館協会、関東地区公共図書館協議会
- 4 **主 管** 静岡県立中央図書館
- 5 **日 時** 令和7年12月1日(月) 午前10時00分から午後3時30分まで
※ 第6分科会のみ午後5時00分まで(3時30分以降退出可)
- 6 **会 場** 静岡県コンベンションアーツセンター グランシップ
(〒422-8005 静岡市駿河区東静岡2丁目3-1 JR東静岡駅隣接)
- 7 **日 程**
 - (1) 全体会
 - 9:30～10:00 受付
 - 10:00～10:30 開会式・表彰式
 - 10:30～10:45 休憩(舞台準備)
 - 10:45～12:15 講演会(後日配信有)
「公立図書館と新刊書籍市場の曖昧な関係：図書館の蔵書傾向および書店支援」
講師：大場 博幸(おおば ひろゆき)氏<日本大学文理学部教授>
 - 12:15～12:25 諸連絡
 - 12:25～13:30 休憩・昼食
 - (13:00～13:30 各分科会受付)
 - (2) 分科会
 - 13:30～15:30(第6分科会のみ 13:30～17:00 ※15:30以降は途中退出可)
 - 第1分科会 図書館サービス①(後日配信有)
「みんなの図書館とまちづくり」
講師：土肥 潤也(どひ じゅんや)氏<みんなの図書館さんかく館長>
 - 第2分科会 図書館サービス②(後日配信有)
「誰もが楽しめる電子図書館～将来性と活用のヒント～」
講師：家禰 淳一(やね じゅんいち)氏<愛知大学文学部人文社会学科教授>

第3分科会 子どもの読書活動（後日配信有）

「へなそうるの森から くらしと物語」

講師：渡辺 鉄太（わたなべ てつた）氏〈児童文学者・翻訳家〉

第4分科会 学校図書館（後日配信有）

「POP 王に学ぶ！学校図書館で活かす POP の力」

講師：内田 剛（うちだ たけし）氏〈ブックジャーナリスト〉

第5分科会 大学図書館（後日配信有）

「図書館と展示～企画展示が導く知識との出会い～」

講師：河合 郁子（かわい いくこ）氏〈東京都足立区 図書館サービスデザイン担当課長〉

的場 ひろし（まとは ひろし）氏〈静岡文化芸術大学デザイン学部デザイン学科教授〉

第6分科会 全国公共図書館研究集会（後日配信有）

事例報告「静岡書店大賞：静岡県の読書推進に向けて」

講師：河口 雅哉（かわぐち まさや）氏〈第12回静岡書店大賞事務局長〉

調査報告「人口減少社会における図書館と地域の関係性とこれからのあり方」

講師：大谷 康晴（おおたに やすはる）氏〈青山学院大学コミュニティ人間科学部

コミュニティ人間科学科教授〉

15:40～16:30「研究協議」

司会・コーディネーター：大場 博幸氏

登壇者：河口 雅哉氏・大谷 康晴氏・

高橋 健二（たかはし けんじ）氏〈静岡県立中央図書館館長〉

16:30～16:55「情勢報告」

植松 貞夫（うえまつ さだお）氏〈公益社団法人日本図書館協会理事長〉

8 参加申込

- (1) 静岡県図書館協会加盟館（室）、静岡県読み聞かせネットワーク会員、
県内小・中・高等学校、特別支援学校、教育委員会
（ボランティア、図書館協議会委員等の関係者を含む）
 - ・申込期間：8月1日（金）から9月7日（日）まで
 - ・申込方法：参加希望を取りまとめ、ふじのくに電子申請サービスで申込み
- (2) 一般の参加希望者（先着順）
 - ・申込期間：10月1日（水）から10月31日（金）まで
 - ・申込方法：原則として、ふじのくに電子申請サービスで申込み
- (3) その他
 - ・申込み後の分科会の変更は受け付けない。当日の申込みは原則として受け付けない。

9 その他

- (1) 中ホールで実施する全体会と第3分科会では要約筆記を行う。手話通訳とその他の分科会の要約筆記は希望があれば行う。
- (2) 講師及び使用する著作物の許諾が得られた場合には、後日 YouTube にて限定配信を行う。
- (3) 開催の可否については、別に定める静岡県図書館大会開催可否の判断基準による。
- (4) 全国公共図書館研究集会を兼ねて開催する。

2 表彰

(敬称略)

(1) 優良読書グループ表彰

・(公社)読書推進運動協議会長賞

「富士市学校読み聞かせネットワーク」(富士市)

富士市学校読み聞かせネットワークは、「富士市内の小中学校で読み聞かせ活動をする各団体が、より質の高い活動をするための連携・情報交換の場としてのネットワーク」として2010年に発足しました。

現在は富士市立中央図書館に協力いただき、運営は静岡県子ども読書アドバイザー16名と富士市内の小中学校で活動する読み聞かせボランティアの会員の皆さんと年3回の例会(勉強会)を行っています。勉強会では、役員が講師となり読み聞かせの基本(本の持ち方・読み方・発声について)や選書では(学年別・科学本などの種類別・読み比べなど)絵本の読み聞かせや語りを役員の実演などで紹介しています。人の読み聞かせを聞くこと、本の持ち方や発声などの実践で能動的な勉強に、グループトークでの意見交換で他校と交流の場となっています。情報は各団体へ持ち帰り共有することで、よりよい読み聞かせの時間になると期待しています。

2023年度より「読み聞かせ勉強会」年9回を開講、松岡享子さん著「えほんのせかいこどものせかい」をテキストに富士市内で読み聞かせの活動をしている方、興味のある方へ読み聞かせの基本を伝えています。

「例会」「読み聞かせ勉強会」の参加が増えていることに読み聞かせへ関心をよせていることがわかります。今後も参加して下さる皆さんと研鑽し各学校で子どもたちにお話を届けていきます。

・静岡県読書推進運動協議会長賞

「上野小 PTCA 読書サポーター・トトロの森」(富士宮市)

上野小 PTCA 読書サポーター・トトロの森は、1988年に発足し、今年で活動37年目となるボランティア団体で、会員数は24名です。

2024年度の主な活動は、読み聞かせと語り(年16回)、練習会(年4回)、学級文庫整備と学校図書館清掃(年14回)、お便り発行(年3回)、卒業記念展示「6年間で読んだ本」作成(年1回)、絵本講座(年1回)、PTA主催「上野小ふれあいまつり」参加(年1回)、富士宮子どもと読書の会主催「交流会」(年5回)とイベント「ねえこの本よんで!」(年1回)参加。

この表彰を励みにこれからも学びを深め、保護者・学校・地域で連携して子どもたちに楽しいおはなしのひとつを届けていきます。

「くまさんクラブ」(静岡市)

私達は平成14年、図書館の個人ボランティアの第1期生として出会い、平成22年に発足、現在は4名で活動しています。

図書館で開かれている赤ちゃん向けおはなし会「おはなしコアラ」を主に活動しています。振り返れば15年、メンバーも熟年から高齢へと向かう中で介護や孫育ての手助けをしながら、なかなか会う機会の少ない中で自己研鑽し、あたたかく楽しいおはなし会になるように努めています。メンバーそれぞれの持つ雰囲気大切に、読み聞かせの世界を作っていくことが目標です。

おはなし会に来てくださるみなさんとの素敵な出会いとみなさんが笑顔で帰っていただけるように、そして絵本の楽しさを知っていただけるようにメンバー一同心掛けていきたいと思っております。

「まきのはらし図書館友の会」(牧之原市)

まきのはらし図書館友の会は、地元図書館と良好な関係を築きながら応援活動を続けています。会員は本好きで、おはなし会や図書ボランティアなどを通じて図書館の魅力を広めています。

図書館は過去を探り、未来を描き、今を生きる力を与えてくれる場所です。多くの人がある魅力に触れ、世界への視野を広げてほしいと願っています。

設立以来、図書館のPRや図書館協議会の設置などを提案してきましたが、牧之原市立図書館の整備拡張に伴い、活動内容の見直しも必要です。今後も適切な距離を保ちつつ、図書館を支える活動を続けていきます。

「時間のはこぶね おはなし会」(河津町)

私達は「小学生だからこそ読み聞かせ」を合言葉に小学生だからこそ読んでほしい、心を動かす力のある絵本、夢の世界への希望がもてる絵本、ナンセンスな世界の面白さを味わえる絵本など、季節や子どもたちの生活に合わせて絵本を選び、毎週読み聞かせをしています。

小学生の時期は本の持つ力を素直に受け止め、生かせる大切な時期です。その大切な時期に、本の持つ魅力にどっぷり浸かってほしいと私達は願っています。

そして、もう一つの役割は、子どもたちの安心安全な居場所としての存在です。ここに行けば、自分を受け入れてくれる誰かがいる。ちょっと行ってみようかな?と思えるそのような場所(人)として、これからも活動を続けていきます。

「おはなしの会 ピロシキ」(南伊豆町)

子供達が絵本を通して心豊かに育ってくれる事を願って活動している読み聞かせのボランティアグループです。南伊豆を拠点とし、今年で発足25年。活動内容は、子供向けの公演会、クリスマス会、各小学校での春と秋のお話し会を行っています。読み聞かせだけでなく、エプロンシアターやパネルシアター、またピアノの生演奏と共に朗読をするスクリーンシアターも特色の一つです。

活動を続けていく中で絵本や童話は、子供だけのものだけでなく、大人の心にも深く響くすばらしいものが沢山ある事を実感し、多くの方にこの世界を知ってもらいたくて15年程前から大人向けの公演会も行っています。ワクワクする気持ちを大切に今後も続けていきます。

「函南町点字グループ」(函南町)

私達函南町点字グループは、現在7名で活動しています。

主に小学校の福祉授業、視覚障害者の方から依頼の文書の点訳、又選挙の時に候補者の資料作成等で、町にも協力しています。広報も点訳しています。又函南町立図書館に点訳本50巻以上納入させていただき27回の貸出実績もあります。

月1回の定例会で、点訳の技術向上と勉強に取り組んでいます。

又小学校のクラブ活動も今年で12年になり、「難しかったけど打つのが楽しかった」「点字の決まりを知れて良い経験になった」「家でもやってみたい」との小学生の声や、手が痛くなったと言いながらも真剣に点字を打つ姿に、私達もやりがいを感じています。

各種行事やイベントにも積極的に参加し、点字の紹介をしています。

(2) 社会教育功労者表彰（文部科学省）

氏名	所属
伊藤 博	静岡県読書推進運動協議会

(3) 全国公共図書館協議会表彰

氏名	所属
増田 曜子	静岡県立中央図書館
志村 典子	三島市立図書館
木本 千珠子	三島市立図書館

※県図書館協会加盟館一覧順
所属は令和7年3月31日現在

(4) 静岡県図書館協会表彰

氏名	所属
眞子 みな	静岡県立中央図書館
殿岡 容子	静岡県立中央図書館
野沢 佳奈子	静岡県立中央図書館
飯塚 享子	静岡県立中央図書館
飯塚 悦子	伊豆市立中伊豆図書館
石田 康基	三島市立図書館
名倉 和美	裾野市民文化センター図書室
伊海 律子	沼津市立図書館
内藤 真由美	沼津市立図書館
藤澤 都雪	富士市立西図書館
鈴木 富貴	富士市立中央図書館
祢次金 優子	富士市立富士文庫
鈴木 綾乃	富士宮市立中央図書館
高橋 沙織	富士宮市立中央図書館
伊藤 優	静岡市立中央図書館
平田 磨美	静岡市立御幸町図書館

氏名	所属
坂田 祐季	静岡市立藁科図書館
太田 明穂	菊川市立図書館菊川文庫
中山 元博	掛川市立中央図書館
米山 弘味	掛川市立大須賀図書館
芹澤 由美子	袋井市立浅羽図書館
伊与田 都巳	浜松市立中央図書館
鈴木 紀予	浜松市立中央図書館
瀬崎 安史	浜松市立中央図書館
池川 里果	浜松市立中央図書館
山田 恵	東伊豆町立図書館
斉藤 のぞみ	静岡大学附属図書館
柴田 佳寿江	浜松医科大学附属図書館
宮崎 智加	聖隷クリストファー大学図書館
清水 明	静岡県立大学短期大学部附属図書館
片瀬 紀子	静岡県立大学短期大学部附属図書館

※県図書館協会加盟館一覧順、
所属は令和7年9月1日(退職者は3月31日)現在

3 講演会・分科会概要

(1) 講演会

「公立図書館と新刊書籍市場の曖昧な関係：図書館の蔵書傾向および書店支援」

講師：^{おおば}大場 ^{ひろゆき}博幸氏（日本大学文理学部教授）

公立図書館が批判されてきた各種所蔵に関する傾向分析と書店への影響、そしてこれからの図書館と書店の関係について、「書店・図書館等関係者における対話の場」で座長を務められた日本大学教授の大場博幸様にご講演いただいた。

1997年を境に出版業界の経済規模が縮小し、政府及び議員連盟が書店支援に動き始めた。各種支援策に加え、提言では「書店と図書館の連携促進」も挙げられ、国主導で連携事例集の作成や「対話の場」が設置され、共存のためのルール作りが議論された。議論を通じ、図書館蔵書が書店売上に与える影響は大きくないがベストセラーは小さくないこと、及び地元書店からの適正価格での購入について共通理解・検討を求めていくことが共有された。

図書館蔵書の傾向と書店売上への影響について、根拠とされた自著[1]を解説する。図書館蔵書は要求論・価値論や無料貸本屋論争など幾度と議論されてきたため、実証データを基に統計分析を行い、4つの観点から所蔵傾向及び売上への影響を調査した。「需要と質のバランス」・「主題の多様性」は、需要（話題性等）が所蔵に大きく影響し、質（選定図書等）や出版社の信用の高さも影響する。分類では文学や地理・歴史等は多め、語学や総記は少なめとなるほか、児童書、婦人本は多いが学習参考書、文庫本は少ないなど、販売対象・形態などもそれなりに反映される。「意見対立のある主題」は、大規模館であれば中立に近くなるが、資料費の少ない中小規模館では出版数のバランスや信用の高い出版社の出版状況が反映され偏りやすい。「新刊書籍市場との関係」は、売上部数の少ない書籍は図書館の貸出33回で売上がマイナス1冊程度だが、ベストセラー類は貸出6回でマイナス1冊程度と推計され、大多数の書籍は売上への影響が小さいが、ベストセラーは影響が大きい。

書店と図書館の関係について、地域書店が苦境に喘いでおり、図書館の大口納品に期待されるが割引価格購入と装備済納品が負担となっている。書店支援の一環として定価購入という考えもあるが、受入冊数が減少する点や、受入をベストセラーに集中させると逆に書店の減収になりかねない点に注意が必要である。また装備は、図書館が書店に対しレクチャーを行うなど、各地で支援策が模索されている状況である。

図書館と地元書店がしっかり関わる場合、地元書店には図書館からの要求を捌く地力が求められる一方、図書館は大手納入業者と比較しサービスの低下に耐える必要がある。両者にその覚悟があるか、地域住民も含めた理解が求められるであろう。

[1]大場博幸、『日本の公立図書館の所蔵：価値・中立性・書籍市場との関係』。樹村房, 2024, 288p, ISBN978-4-88367-387-2.



公立図書館と新刊書籍市場の曖昧な関係：図書館の蔵書傾向および書店支援

大場博幸（日本大学文理学部）

1 小売書店支援論と図書館

2023年5月に自民党の書店議連「街の本屋さんを元気にして、日本の文化を守る議員連盟」が岸田内閣に提言書を提出し、政府による小売書店支援政策が検討されることとなった。議連の認識では、図書館と書店は共存できておらず、①新刊の貸出・複本を抑制するルールが必要であるという。また②図書館との取引によって地域の書店の経営を支援できる可能性があるともする。議連の認識は妥当だろうか。

2 図書館所蔵の論点

1)需要か質か、2)主題の多様性、3)対立意見間の中立性、4)書籍市場との関係

3 教養新書：特定シリーズの優位

2004年4～6月発行の教養新書234タイトルについて、2005年に全国276自治体の市町村立図書館の所蔵を調査した。結果を表4-3に示す（表番号は『日本の公立図書館の所蔵』に準拠する）。

表4-3 所蔵上位40タイトル（順位 / タイトル / 著編者 / シリーズ / 所蔵冊数）			
1	死の壁	養老孟司	新潮新書 853
2	頭がいい人、悪い人の話し方	樋口裕一	PHP新書 753
3	上司は思いつきでものを言う	橋本治	集英社新書 398
4	憲法読本[第3版]	杉原泰雄	岩波ジュニア新書 334
5	樋口一葉	関礼子	岩波ジュニア新書 329
6	怒りの方法	辛淑玉	岩波新書 328
7	本 起源と役割をさぐる	犬養道子	岩波ジュニア新書 325
8	新・歩いて見よう東京	五百沢智也	岩波ジュニア新書 317
9	デジカメ自然観察のすすめ	海野和男	岩波ジュニア新書 316
10	日本の農業を考える	大野和興	岩波ジュニア新書 312
11	地球は火山がたった	鎌田浩毅	岩波ジュニア新書 305
12	野口英世	井出孫六	岩波ジュニア新書 302
13	学習カトレニング	海保博之	岩波ジュニア新書 301
14	古典がもっと好きになる	田中貴子	岩波ジュニア新書 300
15	フィールドワークは楽しい	岩波書店編集部	岩波ジュニア新書 289
16	日本縦断 徒歩の旅	石川文洋	岩波新書 286
17	教科書が危ない	入江曜子	岩波新書 274
18	障害者とスポーツ	高橋明	岩波新書 273
19	人生を肯定するもの、それが音楽	小室等	岩波新書 266
20	判断力	奥村宏	岩波新書 265
21	イスラム主義とは何か	大塚和夫	岩波新書 262
22	政治献金	吉賀純一郎	岩波新書 262
23	スコットランド 歴史を歩く	高橋哲雄	岩波新書 252
24	世界経済入門[第3版]	西川漸	岩波新書 251
26	戦後政治の崩壊	山口二郎	岩波新書 246
25	構子の話	毛利秀雄	岩波新書 246
27	ひとり旅は楽し	池内紀	中公新書 202
28	味のなんでも小事典	日本味と旬学会編	ブルーバックス 197
29	裏に輝いた1778話	巖村卓	新潮新書 193
30	カラー版 ギリシャを巡る	萩野矢野記	中公新書 192
31	イラク建国	阿部重夫	中公新書 189
32	脳と意識	川島雄太・安達忠夫	講談社現代新書 184
33	カラー版 遺跡が語るアジア	大村次郎	中公新書 180
34	座名のゲーテ	齋藤孝	光文社新書 180
35	物語スペインの歴史 人物篇	岩根園和	中公新書 179
36	戦艦に騎法	玄術宗久	新潮新書 176
37	幕末歴史散歩 東京篇	一坂太郎	中公新書 174
38	超ひも理論とはなにか	竹内薫	ブルーバックス 172
39	演技と演出	平田オリザ	講談社現代新書 168
39	「分かりやすい文章」の技術	藤沢晃治	ブルーバックス 168
41	循環型社会	吉田文和	中公新書 166
41	算数オリンピックに挑戦 00～03年度版	算数オリンピック委員会編	ブルーバックス 166

4 統計分析の基礎

5 一般書籍：主題の多様性

2006年1～6月発行の一般書籍4,578タイトルについて、2010年上半期に全国1,098自治体（公民館図書室・学校図書館などを含む）の所蔵を調査した。表6-4に、Cコード各カテゴリと出版社コード、新刊価格、選定図書、Bingでのヒット件数、Amazon.co.jpのカスタマーレビュー

一数およびランキングの加工値を説明変数、所蔵数を目的変数としたトービットモデルによる重回帰分析の結果を示す。

(2)		(基準カテゴリ)	
C-CODE1桁 0 一般		C-CODE3桁 0 総記	-0.608 (0.254) *
C-CODE1桁 1 教養	-0.299 (0.145) *	C-CODE3桁 1 哲学・宗教・心理学	0.788 (0.134) ***
C-CODE1桁 2 実用	0.001 (0.107)	C-CODE3桁 2 歴史・地理	1.505 (0.132) ***
C-CODE1桁 3 専門	-0.730 (0.094) ***	C-CODE3桁 3 社会科学	0.379 (0.112) **
C-CODE1桁 5 婦人	1.066 (0.188) ***	C-CODE3桁 4 自然科学	
C-CODE1桁 6 学習参考書(小中)	-2.913 (0.402) ***	C-CODE3桁 5 工学工業	0.303 (0.142) *
C-CODE1桁 7 学習参考書(高校)	-3.588 (0.338) ***	C-CODE3桁 6 産業	0.668 (0.215) **
C-CODE1桁 8 児童	1.424 (0.179) ***	C-CODE3桁 7 芸術・生活	-0.186 (0.127)
C-CODE1桁 9 雑誌扱い	0.393 (1.928)	C-CODE3桁 8 語学	-0.626 (0.199) **
C-CODE2桁 0 単行本		C-CODE3桁 9 文学	1.206 (0.116) ***
C-CODE2桁 1 文庫	-0.699 (0.097) ***	出版社コード	0.301 (0.028) ***
C-CODE2桁 2 新書	-0.649 (0.133) ***	ln新刊価格	0.029 (0.064)
C-CODE2桁 3 全集・双書	-0.261 (0.106) *	選定図書	1.541 (0.062) ***
C-CODE2桁 4 ムック・その他	-0.910 (1.927)	lnBing件数	0.463 (0.045) ***
C-CODE2桁 5 事・辞典	0.929 (0.221) ***	lnAmazon評数	1.725 (0.189) ***
C-CODE2桁 6 図鑑	0.865 (0.434) *	BcAmazon需要	-0.531 (0.085) ***
C-CODE2桁 7 絵本	0.245 (0.220)	切片	6.679 (0.939) ***
C-CODE2桁 8 磁性媒体など	-2.835 (0.442) ***	対数尤度	-8392.146
C-CODE2桁 9 コミック	-2.622 (0.726) ***	AIC	16852.29
		サンプルサイズ	4562
		打ち切りサンプル数	620

C-CODE 販売対象について、「一般」を基準とすると所蔵が多いのはカテゴリ「児童」「婦人」で、少ないのは「学習参考書」「専門」「教養」である。

C-CODE 発行形態について、「単行本」を基準とすると所蔵が多いのはカテゴリ「事・辞典」「図鑑」で、少ないのは「コミック」「ムック他」「文庫」「新書」「全集・双書」「磁性媒体など」である。

C-CODE 分類について、「自然科学」を基準とすると所蔵が多いのは「文学」「歴史・地理」「哲学・宗教・心理学」「産業」「社会科学」「工学工業」で、少ないのは「語学」「総記」である。

上のほか、推薦図書リストに選定された否か、ネットでの言及数で示される需要の高さ、出版社の信用の高さ、が所蔵数とプラスの相関のある要因となる。

6 意見対立のある主題：中立性

1992年～2015年6月発行の「集団的自衛権」を主題とする書籍91タイトルについて、2015年7月に全国5,003の公立図書館の所蔵を調査した。

結果を表8-2に示す。賛成・否定本で出版点数に違いがある(A)が、一点当たりの所蔵数に直すと均等に近づくことを指摘できる(C)。

	(A) 点数	(B) 所蔵数	(C) 一点当たりの 平均所蔵数	(D) Bing件数の 平均値
賛成	19	3,053	160.7	16.16
否定	60	11,152	185.9	12.98
不明・中立	12	669	55.8	8.67
計	91	14,874	163.5	13.08
(岩波除否定)	52	6,380	122.7	11.19

所蔵に関係すると考えられる質や需要などの指標——書評数、価格、出版年など——を説明変数に加えて統制し、賛否と所蔵数との関係を重回帰分析によって検証したところ、出版社の信用との強い相関が確認された（表 8-3）。「集团的自衛権」を主題とした書籍に限れば、否定本を多く発行する特定出版社への所蔵の偏りが見られた（表 8-4）。

	係数	ロバスト標準誤差	限界効果
否定本ダミー	0.142 (0.253)		25.975
出版社コード	0.414 (0.094) ***		75.843
選定図書	0.871 (0.266) **		159.580
書評数	0.266 (0.163)		48.772
価格(千円あたり)	-0.181 (0.025) ***		-33.060
出版年	-0.011 (0.037)		-2.096
Bing件数 (切片)	0.038 (0.018) *		7.020
2 x 対数尤度	-992.779		
AIC	1010.8		
サンプルサイズ	90		

†:p<0.1 *:p<0.05 **:p<0.01 ***:p<0.001

表8-4 出版社コード別の所蔵数

	(A) 点数	(B) 所蔵数	(C) 一点当たりの 平均所蔵数	(D) Bing件数の 平均値
岩波書店	8	4,772	596.5	24.63
2桁出版社*	7	1,780	254.3	24.00
3桁出版社	22	4,434	201.5	13.68
4桁出版社	26	2,583	99.3	10.50
5桁出版社	19	946	49.8	10.42
6桁出版社	9	369	41.0	5.89
計	91	14,884	163.6	13.08

* 岩波書店刊行書籍を除く

7 新刊書籍市場との関係

2019年4月～5月発行のAmazon.co.jpにおけるカテゴリ「文学・評論」「ビジネス・経済」に属する書籍600タイトルについて、2019年5月～2020年3月の毎月、全国1,326自治体の所蔵のほか、Amazon.co.jpのランクや古書供給数ほかを調査し、パネルデータとした。

表11-2 所蔵数とln月間売上部数ほか要因の分析

	(a5)	(a6)
ln前月所蔵数	-0.055 *** (0.013)	-0.055 *** (0.013)
BcAmazon需要	1.252 *** (0.098)	1.263 *** (0.174)
lnAMP古書価格	0.092 *** (0.021)	0.092 *** (0.021)
lnAMP出店数	-0.223 *** (0.039)	-0.223 *** (0.040)
委託期間ダミー	0.087 * (0.034)	0.087 * (0.034)
電子書籍ダミー	0.018 (0.077)	0.018 (0.077)
ln前月所蔵数 x BcAmazon需要	-0.002 (0.032)	
固定効果：ISBN	Y	Y
固定効果：調査月	Y	Y
修正済決定係数	0.9162	0.9162
Within R ² 値	0.1036	0.1036

個体数600，観測数5386 / ()内はクラスター標準誤差

†: P < 0.10, *: P < 0.05, **: P < 0.01, ***: P < 0.001

表11-3 貸出数とln月間売上部数ほか要因の分析

	(b5)	(b6)
ln前月貸出数	-0.056 *** (0.012)	-0.056 *** (0.012)
BcAmazon需要	1.253 *** (0.099)	1.178 *** (0.173)
lnAMP古書価格	0.094 *** (0.021)	0.093 *** (0.021)
lnAMP出店数	-0.216 *** (0.039)	-0.217 *** (0.040)
委託期間ダミー	0.091 ** (0.034)	0.091 ** (0.034)
電子書籍ダミー	0.023 (0.077)	0.023 (0.077)
ln前月貸出数 x BcAmazon需要	0.017 (0.032)	
固定効果：ISBN	Y	Y
固定効果：調査月	Y	Y
修正済決定係数	0.9163	0.9163
Within R ² 値	0.1046	0.1047

個体数600，観測数5386 / ()内はクラスター標準誤差

†: P < 0.10, *: P < 0.05, **: P < 0.01, ***: P < 0.001

表 11-2 は所蔵数（対数値）、表 11-3 は貸出数（対数値）を目的変数としたときの、固定効果モデルによる重回帰分析の結果である。交差項を加えない列（a5）（b5）における ln 前月所蔵数と ln 前月貸出数の係数はそれぞれ-0.1 以下である。

これらを実数に変換して解釈を試みたのが表 11-4 となる。所蔵一点につきまたは貸出一点につき損失売上部数は売上部数の多寡に応じて変化する。中央値または平均値においては、図書館による新刊書籍市場へのマイナスの影響は大きくない。しかし少数の売上部数の多いタイトルに限れば、その影響は無視できないと言える。

表11-4 損失売上部数の売上上位グループ別推計値

グループ名	タイトル数	所蔵一点につき損失売上部数*	貸出一点につき損失売上部数**	月平均売上部数	月平均所蔵数	月平均貸出数	業者Aデータ総売上部数	全国での推定売上部数
ベストセラー群	2	-0.731	-0.459	4276.8	1287.7	1044.5	25,000部以上	10万部以上
ミドルヒット群	30	-0.199	-0.146	494.6	546.2	378.1	2,500部以上 25,000部未満	1万部以上10万部未満
上位1/6群	100	-0.153	-0.131	319.8	458.4	272.6	800部以上	3,200部以上
上位2/6群	100	-0.037	-0.050	49.3	291.8	111.0	399部以上800部未満	1,596部以上3,200部未満
全体平均値	600	-0.061	-0.081	70.0	251.6	96.2	765部（平均値）	3,060部
全体中央値	600	-0.014	-0.026	10.0	157.0	43.0	203部（中央値）	812部

* 所蔵一点につき損失売上部数 = (月平均売上部数 × 4 × -0.055) ÷ (月平均所蔵数)

** 貸出一点につき損失売上部数 = (月平均売上部数 × 4 × -0.056) ÷ (月平均貸出数 × 2)

8 図書館所蔵まとめ

・1) 需要か質か + 2) 主題の多様性

需要は所蔵に関係する重要な要因である。このほか、出版社の信用の高さは所蔵を有利にし、学修参考書やマンガといった特定の表現様式は所蔵を不利にする。このほか様々な要因と関連した所蔵への弱い濃淡がある。

・3) 対立する意見間での中立性

タイトルの点数が偏っているため、対立意見のある書籍もどちらかに偏って所蔵されているように見える。他の要因についても考慮すると、特定の出版社に対する信用が強く関係する。

・4) 書籍市場との関係

図書館所蔵によるマイナスの影響は、大半の書籍に関して大きくない。ただし、一部の需要の高いタイトルについてはそうではない。

9 小売書店支援論ふたたび

定価購入およびベストセラー書籍の所蔵数の抑制は、地元小売書店支援になる可能性が高い。ただし、それら書店との定価での取引は、大手納入業者と比較した場合の、購入できる資料数の減少とサービスの低下を確実にもたらす。小売書店支援をするうえでは、地域の読書環境をどう設計するかについてのグランドデザインを考える必要がある。

(2) 分科会

第1分科会 図書館サービス①

「みんなの図書館とまちづくり」

講師：^{どひ}土肥 ^{じゅんや}潤也氏（みんなの図書館さんかく館長）

「みんなの図書館さんかく」の実践を通じて、本を基点とした住民参加型のまちづくりの可能性について、みんなの図書館さんかく館長の土肥潤也氏に講演いただいた。

土肥氏は、自身が静岡県焼津市で始めた「みんなの図書館さんかく」の目的として、地域の人々が本を通じてつながる居場所を提供することを強調している。この図書館の運営スタイルは民営であり、地域の空き店舗を利用して、誰もが自由に入出りできるオープンな空間を形成している。その結果、全国で百館以上の同様の図書館が展開されるまでに成長している。



土肥氏は、地域に根ざした図書館が果たす役割は単なる情報提供にとどまらず、住民の交流を促進し、地域の活性化に寄与するものであると語っている。地域のあちこちに絵本がある場所を作り、人々が自然に集まるような拠点を作りたいという思いが込められている。また、図書館の運営においても、ボランティアや地域の住民が主体となることが重要であり、共助の意識を育てることの大切さを訴えている。

日本では、未だ図書館が行政の手によるものという認識が強く、さまざまな課題が存在している。しかし、土肥氏はこの状況を打破するためには、市民自らが運営に関わり、図書館を自分たちの場所とし、自身のニーズに応じた新しいサービスを生み出していくことが不可欠であると提言している。この考え方は、地域における当事者意識を高め、より豊かなコミュニティの形成に寄与するものと期待されている。

また、土肥氏は地域の歴史や風土を理解し、地域独自の図書館を育成することが大切であると強調している。例えば、商店街と連携し、地域のニーズに合わせたプログラムやイベントを企画することで、地域の活性化を図ることが可能であるという具体例も紹介されている。最終的には、図書館を、地域の人々が集い、交流し、新たなまちづくりを進めるための拠点として育てていく考えが示されている。

この分科会では、参加者との質疑応答も行われ、土肥氏は自身の実践から得た知見をもとに、地域との関わり方やボランティアの受け入れ体制についての具体的なアドバイスを共有した。質疑の中でも、行政と市民の協働や、地域の特性を生かした取り組みの重要性が再確認され、参加者の関心を引き起こしている。

今回の講演を通じて、「みんなの図書館さんかく」の理念や地域のまちづくりへの貢献について理解を深めていただけたことと思われる。土肥氏の熱意あるお話を聞き、参加者各々が自分たちの地域での実践に活かし、次世代へとつなげる図書館サービスの創出を期待したいと考えている。

第2分科会 図書館サービス②

「誰もが楽しめる電子図書館 ～将来性と活用のヒント～」

講師：家禰^{やね} 淳^{じゅんいち} 一 氏（愛知大学文学部人文社会学科教授）

電子図書館の利活用のヒントや市町村での実践例、SNSや認知バイアスといったメディア・リテラシーに関する課題の解決に向けた図書館の役割について、愛知大学文学部人文社会学科教授の家禰淳一氏に講演いただいた。

前半では、まず Kindle 等の登場により世界的な電子書籍市場がどのように拡大してきたか、その流れがコロナ禍において日米双方での利用の急増につながったことが整理された。そのうえで、日本の現状として、電子書籍市場の大部分を漫画が占めていることや、依然として紙媒体志向が強いことが紹介され、こうした要因が公共図書館における電子書籍サービスの伸び悩みに影響している可能性が示された。続いて、OverDrive に代表される米国公共図書館の電子書籍・オーディオブックの提供事例に加え、ニューヨーク公共図書館やロサンゼルス公共図書館での多言語対応やデジタルリテラシー支援の取り組みと、東京都立図書館などの日本の公共図書館の事例と比較がされた。その比較を通じて、タイトル数や予算規模、著作権・ライセンス条件などの違いが、日本における電子書籍の導入・運用上の課題となっている点が明らかにされた。

また、古文書や地域資料を対象としたデジタル化の基本手順、および NDL 遠隔研修等の具体的な活用方法が示され、QR コードを用いた電子書籍紹介や、アイデア共有といった利用促進策について、ワークショップ形式で参加者とともに検討が行われた。自館での導入状況や課題が参加者から積極的に共有され、今後の電子図書館の利活用に向けた手がかりを得る機会となった。

後半では、テーマを「メディア情報リテラシーと図書館」に移し、高度情報化への対応や情報リテラシー教育の必要性についてお話しいただいた。まず、デジタル手続法や GIGA スクール構想など、近年の政策動向が整理され、その恩恵の陰で社会人や高齢者が ICT スキルの面で取り残されてしまっている現状が指摘された。そのうえで、スマートフォンの基本操作から情報検索、メディア・リテラシー、情報モラル、さらに認知バイアスの基礎理解までを一体的に扱う社会人向けモデル・カリキュラム案が提示され、対面型講座と自学自習型コンテンツを組み合わせた提供形態が提案された。また、UNESCO の MIL、IFLA ガイドライン、ACRL フレームワーク、PISA2018 といった国際的枠組と、日本の読書活動推進基本計画との関係が整理され、読書教育と情報リテラシー教育を統合する視点の重要性が示された。公共図書館・学校図書館が、批判的な読みと認知バイアスへの気づきを育成する公共空間として機能する必要があることが強調され、参加者にとって今後の実践を考える上で多くの示唆を与える講演会となった。



令和7年度 第32回 静岡県図書館大会

**誰もが楽しめる電子図書館
～将来性と活用のヒント～**

愛知大学
家禰 淳一（やね じゅんいち）

1

世界的な電子書籍市場の発展

- **電子書籍市場の成長要因**
 - 電子書籍は物理的なスペースを必要とせず、利便性が高い点から徐々に普及
 - 特にAmazonの「Kindle」の成功により、電子書籍市場は世界的に拡大
 - Appleの「iBooks」も電子書籍市場の拡大に貢献
- **電子書籍デバイスと技術の進化**
 - 電子インク技術により、目に優しいディスプレイが登場
 - クラウド技術の進展により、複数のデバイスで読書が可能に
 - 読者はスマートフォン、タブレット、パソコンなどで書籍をシームレスに楽しめる

2

コロナ禍による電子書籍市場への影響

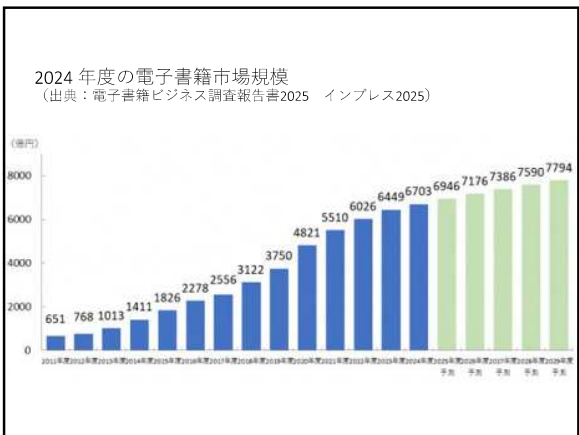
- **COVID-19による消費者行動の変化**
 - 書店の一時閉鎖や物流の停止により、消費者は紙の書籍を購入することが難しくなった
 - デジタル化された書籍の利便性が改めて注目され、電子書籍の需要が急増
- **市場データ**
 - 米国における2020年の電子書籍売上は前年比11.7%増加
 - 日本においても電子書籍市場は28.8%の成長を記録し、約3200億円規模に達した
 - コロナ禍がデジタル書籍市場の成長を大きく後押しした

3

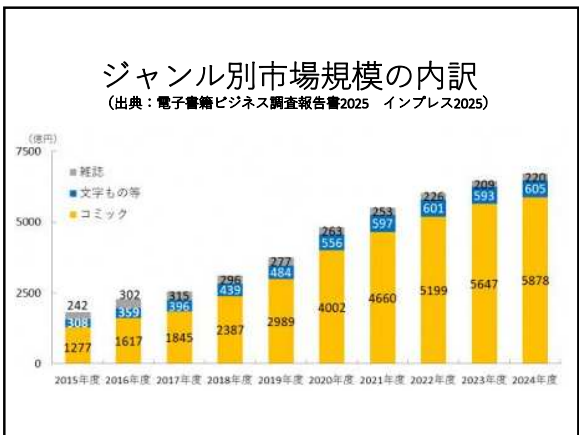
米国と日本の電子書籍市場の比較

- **米国の電子書籍市場**
 - Amazonの「Kindle」が主導し、幅広いジャンルの電子書籍が提供されている
 - フィクションやノンフィクション、学術書などの多様なジャンルに需要がある
- **日本の電子書籍市場**
 - 日本の市場は独特で、電子書籍市場の約80%を漫画が占めている
 - 「LINEマンガ」や「コミックシーモア」などの専用アプリが市場拡大に貢献
 - 日本の消費者は依然として紙媒体に対して高い信頼感を持っているため、市場拡大のペースは米国よりも緩やか

4



5



6

公共図書館における電子書籍提供の進展

- **米国の電子図書館システム**
 - OverDriveをはじめとする電子図書館システムが普及
 - 利用者はインターネットを通じて自宅から電子書籍を借りることができる
 - 特にコロナ禍で利用者数が急増し、物理的な図書館の閉鎖中も情報アクセスの手段として機能した
- **日本における電子図書館サービス**
 - 東京都立図書館が2020年に新しい電子図書館サービスを導入
 - 蔵書のデジタル化が進むが、予算や提供タイトル数に課題が残されている
 - 利用者は依然として紙媒体を好む傾向が強い

7

日本の公共図書館 電子図書館サービスの動向

- 公共図書館 電子図書館サービス（電子書籍サービス）導入図書館 2025年10月1日
- https://aeks.or.jp/Activity/Electronic_library_introduction_record.html



(出典：電子出版制作・流通協議会)

8

米国公共図書館の電子書籍・オーディオブックの提供の歴史

- **電子書籍の普及の始まり**
 - 2007年にAmazonがKindleを発表し、電子書籍市場が急成長。
 - 図書館も電子書籍を導入し、物理的な本を補完する形でサービスを展開。
- **オーディオブック市場の拡大**
 - Audibleなどのプラットフォームがオーディオブックの普及を促進。
 - 特に視覚障害者や高齢者層に向けて、オーディオブックの利用が急増。

9

米国公共図書館におけるデジタルサービスの導入

- **OverDrive、Hooplaなどのデジタルプラットフォームの登場**
- OverDriveやHooplaなどのプラットフォームが、電子書籍やオーディオブックの提供をサポート。
- モバイル端末を通じて自宅からもアクセスが可能。
- **デジタルサービスの普及状況**
- 2022年の統計では、米国全体で約5億件のデジタルコンテンツが貸し出された。
- コロナ禍の影響でデジタルコンテンツの利用が急増。

10

コロナ禍がもたらした変化

- **デジタルコンテンツの需要増加**
- コロナ禍による図書館の物理的閉鎖がデジタルコンテンツ需要の急増を促す。
- リモートワークやリモート学習が広まり、若年層を含む新たな利用者層が増加。
- **電子書籍、オーディオブック、電子雑誌の利用増加**
- 特に若年層と高齢者層で、電子コンテンツの利用が急増。
- オーディオブックは「ながら聴き」としての需要が高まる。

11

ニューヨーク公共図書館の事例

- **電子書籍の貸出増加と多言語対応**
- 2020年、電子書籍貸出数は60%以上増加。
- 多言語対応（スペイン語、中国語、アラビア語）が強化され、より多様な利用者に対応。
- **インターネット環境への対応**
- Wi-Fiホットスポットの提供により、インターネット環境が整っていない家庭にもサービスを提供。

12

ロサンゼルス公共図書館の事例

- **ヤングアダルト向けコンテンツの利用増加**
- 特にヤングアダルト向けコンテンツの利用が増加。
- リモート学習支援のためのオンライン教育リソース提供が拡充された。
- **デジタルリテラシー向上の取り組み**
- バイリンガル教育プログラムや地域コミュニティとの連携を通じたデジタルリテラシー向上の取り組みが行われた。

13

日本の公共図書館における課題

- **提供タイトル数の制限**
 - 日本の公共図書館では、電子書籍の提供タイトル数が限られており、利用者の多様なニーズに十分応えられていない
- **予算上の制約**
 - 電子書籍購入には多額の費用がかかり、紙の書籍と併せて予算の配分が難しい
- **文化的な要因**
 - 日本の読者は紙媒体の書籍に対する信頼が依然として強いため、電子書籍の利用が進みにくい
 - 電子書籍の普及には、利用者の意識変革も必要

14

著作権とライセンス問題

- **著作権とライセンスの課題**
- 電子書籍、オーディオブック、電子雑誌には、著作権とライセンスの制約がある。
- 貸出回数や同時利用者数に制限が設けられているため、人気のコンテンツでは長い貸出待ちが発生することがある。

15

NDL 資料デジタル化 遠隔研修

- 資料デジタル化の基礎
- https://www.ndl.go.jp/jp/library/training/remote/digi_basic_2019.html
- デジタル化資料の権利処理と利活用
- https://www.ndl.go.jp/jp/library/training/remote/digi_copyright_2019.html
- デジタル資料の長期保存に関する基礎知識
- <https://www.ndl.go.jp/jp/library/training/remote/digitalpreservation.html>



16

電子雑誌の提供拡大

- 電子雑誌は、電子書籍・オーディオブックと同様に急速に普及。
- OverDrive、Zinioといったプラットフォームが、数百種類の雑誌を提供。
- 2021年には、全米で約3000種類以上の雑誌が電子化され、特にライフスタイル、ファッション、ニュースの分野で利用が急増。

17

電子雑誌における具体例

- **ニューヨーク公共図書館の電子雑誌提供事例**
- 2021年、500種類以上の新たな雑誌が導入され、利用者層が拡大。
- 地方図書館でも、地域に特化したニュースレターや雑誌が電子化され、情報格差を埋める取り組みが進んでいる。

18

はじめてのデジタル化ガイド (古文書・地域資料)

- デジタル化＝資料を画像・音声・動画にし、閲覧性と保存性を高める
- 目的：①残す(劣化防止) ②使えるようにする(検索・公開)
- 超シンプル作業フロー：
 - 1) えらぶ(重要・傷みやすさ・権利OK)
 - 2) 準備(資料点検/温湿度)
 - 3) 撮る・取り込む(撮影 or スキャン)
 - 4) 整理(命名・フォルダ標準化)
 - 5) 説明を書く(メタデータ)→公開・保全へ

19

最低限の数字とコツ (古文書・地域資料)

- 解像度の目安：本文400-600ppi/細字・新聞は600ppi以上
- 保存フォーマット：画像TIFF・音WAV・動画FFV1等(非圧縮/可逆)
- 配信用：画像JPEG/PDF・音MP3・動画MP4
- バックアップ3-2-1：3コピー・2媒体/場所・1つは遠隔
- 古文書撮影：V字台・均一光・色見本+定規を1枚目に写す
- 画質チェック：暗/明/反射/傾き→撮り直し
- 地域資料のコツ：新聞は記事単位/地図は分割撮影→合成/音声は保存用無加工
- 文字検索：題名→一部書き起こし→OCR+人手確認

20

迷子にしない整理と公開まで (古文書・地域資料)

- 推奨フォルダ：/種別/ID_年/(master, access, ocr, geo, checksums)
- ファイル名例：series_or_itemID_YYYY_MM_DD_p0001.ext
- メタデータ：題名・作成/発行・日付・説明・権利・番号
- 公開ルール：個人情報隠す/権利不明は限定公開+窓口
- 行政資料は原則公開だが個人情報は要確認/可能ならオープン
- 最終チェック：画質・順番・命名・メタデータ・チェックサム・表示文
- よくある誤解：保存はPDFだけ×(元データTIFF等が必須)
- 今日の一步：小さなセット→命名規則→チェック表→代表1点公開

21

公共図書館の電子書籍利用促進 に向けて

- たとえば、電子書籍のQRコードを利用して
- QRガチャとか
- いろんなところにおすすめ電子書籍とそのQRコードをポスターやチラシにして、掲示するとか
- ホームページ上で企画展示とか
- ワークショップでアイデアを出してみよう。



22

ご清聴ありがとうございました！

- **質疑応答**
 - ご質問があればお気軽にどうぞ！
- メール：yane@vega.aichi-u.ac.jp

23

20分間 ワークショップ (情報交換タイム)

- 20分間 前後のテーブルで一組になって、自館の電子書籍の取り組みなどについて情報交換してください。
- ワークショップの後、10分間でどんなお話があったか、発表。

24

令和7年度 第32回 静岡県図書館大会

メディア情報リテラシー編

愛知大学
家禰 淳一（やね じゅんいち）

1

1

1 序論

1.1 高度情報化への対応

- 近年、日本は高度な情報通信ネットワーク社会へと発展してきた。
- インターネットを用いた取引や行政手続の電算化が進展している。
- 学校教育においては、GIGAスクール構想が立案され、部分的に実現した。
- しかし、この制度はごく最近に整備されたにすぎず、その恩恵を受けられない社会人が多数存在する。
- 非正規労働者は十分な情報教育を受けていない。
- 彼らは情報スキルを十分に獲得しておらず、情報化が進
- 環境に適応できないおそれがある。
- 本研究は、成人を対象とする情報教育・学習のためのモデル・カリキュラムを提案することを目的とする。
- 加えて、情報教育・学習のモデル・カリキュラムおよび業務評価基準を試作し、その導入に向けた提案を行う。

2

2

2 成人に対する情報教育・学習の必要性

2.1 関連法規と社会環境

- 政府は2019年12月にデジタル手続法を施行した。
- これにより、行政手続の電算化に関する基本原則と、行政手続のオンライン化に関する原則が確立された。
- 目的は、デジタル技術の活用により手続の利便性を高め、事務の簡素化・効率化を図ることである。
- その指針は「Digital First（デジタル・ファースト）」「Once Only（ワンストップ）」「Connected One-Stop（コネクテッド・ワンストップ）」であり、Digital Firstアクションプランに基づくワンストップサービスを意味する。
- 政府は「人に優しく、誰一人取り残さないデジタル化」を目標に掲げ、デジタル化を積極的に推進している。
- デジタル技術の利用が日常生活に浸透するにつれ、すべての就業者はデジタル化への適応を求められる。

3

3

2.2 社会人のICTスキル水準

- 社会人の情報教育・学習の機会、環境、仕組み、時間等は人により異なり、時間的・空間的制約を受ける。
- この点を踏まえ、学習機会の拡充と、効果的な学びの在り方・方法を検討する。
- ICTスキルに関する調査の結果として、総務省は「通信利用動向調査（2021年）」を公表した。
- 研究では、女性および高齢層で基礎的なコンピュータスキルの水準が低い傾向が見いだされている。

4

4

3 社会人のための情報学習環境

- 総務省は2021年度からデジタル活用支援推進事業に予算措置を行い、主に高齢者を対象とする「講習会」を開催している。
- 本事業は民間事業者への補助金により実施されている。
- 事業形態は「全国展開型」と「地域連携型」の2種類がある。講習内容は基礎講座と応用講座の2種類であり、日常におけるデジタル機器・メディアの操作と活用に重点が置かれている。
- 各自自治体の支援体制としてスマホ教室やパソコン教室がある。
- 内容や開催頻度、受講料の有無は自治体等により異なる。
- そのため、講座間の差異により、すべての受講希望者が満足できる質の高い教育を受けられないという問題が生じる。自治体によっては、公立図書館や生涯学習センター等の施設が別会場で講座を実施する場合もある。
- また、総務省ウェブサイトで公開されている教材を用いた自学自習の方法も存在する。

5

5

4 再教育カリキュラム

- これまでの調査より、社会人向けの情報学習環境は、PCやスマートフォンの基礎操作に集中していると言える。
- したがって、多様な情報リテラシー教育が十分に実現しているとは言いがたい。
- さらに、職種や地域の格差により、社会人が情報教育・学習に割ける時間と労力が課題となっている。
- ゆえに、より効率的で体系的な学習支援システムが求められる。
- 以上の状況を踏まえ、本研究は社会人向け情報教育・学習のモデル・カリキュラムを提案する。

6

6

4.1 モデル・カリキュラム 学習プログラムの流れ

流れ	目的	内容	備考
① 導入	ニュースなど身近なでき事や環境と学習内容を結びつけ、学習へ関心を養める。同時に、どうして学習が必要であるのかを理解する。 また、前回の学習内容の理解の確認や復習を行い、学習の定着を図る。	・ニュース等の世間話 ・クイズ ・前回の学習内容のテスト	
① 展開	学習内容のメイン部分。単元や取り扱う内容によって割合は変わるが、タブレット等を使用した実践、意見交換・議論、リテラシーの学習の観点を含めた学習を行う。	・テキストを使った座学 ・動画を視聴して基本操作やリテラシーを学ぶ ・タブレットやスマートフォンを使用して調べる実践 ・学習者自身及び学習者同士の意見交換	文部科学省や携帯キャリアからでている動画を活用
① まとめ	学習内容の確認を行い、理解度や学習定着の度合いを測る。また、学習者の様子を見ながら学習内容のフォローも行う。	・意見発表 ・学習内容の総括 ・確認テスト	

7

4.1 モデル・カリキュラム 内容

【スマートフォンの操作】 電源のオン・オフ、音量調節、電話、メール、カメラ、マップ、文字入力、音声操作、インターネット利用、アプリケーションの追加	【情報通信技術と社会】 情報検索、問題解決、情報技術、情報システム・サービス（POSシステム、GPSシステム等）
【メディアリテラシー・情報モラル】 インターネット等の基礎知識、コンピュータの構造、個人情報、セキュリティ、メディアの特性、知的財産権、個人間トラブル、サイバー犯罪、認知バイアス、サイバーカスケード、情報資源の活用判断	

8

4.2 学習プログラムの流れ

- モデル・カリキュラムの提供形態として、対面型と自学自習型の双方を用いる。その理由は、社会と人との時間的・空間的・制約の問題を部分的にでも解消し得るためである。
- 情報モラルおよび情報に対する批判的思考力を育成するため、本モジュールは学習内容に以下の点を組み込むことを目標とする。
- 情報教育・学習の意義（社会環境と情報教育）
- デバイスの基本操作
- 情報モラル、メディア・リテラシー、セキュリティ
- 批判的思考力

以下の表に示すように、モデル・カリキュラムを用いたプログラムの流れを提案する。

9

5 児童を対象にしたメディア情報リテラシー

5.1 情報環境の転換：可視性が“信頼”を代替

- SNSとモバイル普及で「誰もが発信者」のエコシステムへ転換
- 可視性指標（再生数・いいね・共有）×レコメンドが相互強化
- 「注意の獲得＝価値」の時代に注目度が信頼の代理に化けやすい
- 誤情報・偽情報・悪意ある情報が混交し境界が不鮮明化
- 真正性・文脈・根拠の吟味が後景化する構造的リスク
- 子どもは情動喚起的見出し・短尺動画・サムネで誤信しやすい
- 「好ましき＝正しさ」の錯誤／短時間での信頼性判断が困難

10

5.2 読書教育の役割：批判的理解を“長い時間”で育てる

- 読書は意味理解の深化・内省・対話を促す「長い時間」の営み
- 体験的に学ぶ：①事実／意見の区別 ②主張 - 根拠対応
- ③反証可能性 ④参照・引用（学術的規範の初歩）
- 情報リテラシーの中核概念と深く共振する学習装置
- 学習循環「読む→調べる→確かめる→書く→共有」を設計
- 学校図書館×公共図書館の協働で循環を制度化
- 読書と調べ学習の往還で“検証する読み”を定着

11

5.3 国際枠組：MIL/IFLA/ACRL/PISAの示唆

- UNESCO (2011) - MILを政策枠組に位置づけ
- 2021スローガン「Think Critically, Click Wisely!」を再確認
- IFLA (2006) - 探索→評価→活用→創造を支える“図書館”
- ACRL (2015) - 「情報は構築される／権威は文脈依存」の閾値概念
- スキル中心→概念中心への転換を後押し
- OECD PISA 2018- 複数テキスト統合・真偽判断・出典評価を制度化
- 児童期から批判的評価を埋め込み、図書館が実装主体に

12

5.4 日本の政策文脈：制度整備と実装条件

- 学習指導要領：情報活用能力を学習基盤に位置づけ
- 教科横断での育成+GIGAスクール（1人1台）で環境整備
- 第五次読書活動推進計画（2023-2027）：学校・家庭・地域・図書館の連携
- デジタル×アナログ横断の読書・学習環境を整備
- 学校図書館法改正（2014）：学校司書の制度的位置づけ明確化
- 学校図書館 - 公共図書館の棲み分けと連携に人的基盤
- 図書館＝読書教育×情報リテラシーをつなぐ公共学習空間の前提

13

13

5.5 現場実装の課題：三つの隘路と処方箋

- 隘路① 技能偏重：検索ハウツーに偏り概念的理解が不十分
- 隘路② 評価設計：学力・市民的判断力の可視化が弱い
- 隘路③ プラットフォーム依存：推薦・ランキングを誤信しやすい
- 処方：読書の深さを核にラテラル・リーディング／SIFTを埋込
- Stanford COR：外部検証の短時間戦略で判断の改善可能
- 学校図書館×公共図書館の教育的役割を再設計
- 授業デザインに概念・評価・検証方略を一体化

14

14

5.6 研究目的・枠組・対象：統合モデルの検証

- 目的：図書館情報学の視座から「読書教育×情報リテラシー」統合モデル構築
- 方法：公共図書館の実践事例で妥当性／運用可能性を検証
- 対象：小牧市立図書館「sagasokka」活用の分析
- 交差点：情報行動（探索→評価→活用）×読書行動（精読→比較→再読）
- 介入：UIと司書スキャフォールディングの効果測定
- 指標① 検索着手率・語彙多様性・再検索の試行
- 指標② 複数資料同時選択と主張 - 根拠の言語化
- 指標③ 口頭出典→簡易脚注への段階化（行動・言語指標）

15

15

5.7 立脚点：検証を学ぶ公共空間としての図書館

- 図書館＝資料と人の媒介+社会的検証を学ぶ場
- DigComp 2.2：AI・推薦・プロファイリング時代の前提を明示
- 「関連度」≠「信頼性」を学習タスクで身体化する必要
- 深い読書体験×迅速なオンライン検証方略の橋渡し
- 図書館の公共的価値の核心＝“検証する読み”の育成
- 本稿：理論・制度・実践の三層で価値を具体化
- 小牧市立図書館の事例で可搬性と費用対効果を議論

16

16

6 理論的基盤：情報リテラシー概念と国際的展開

6.1 情報リテラシーの定義の多層性と変遷

- 1974年Zurkowski：情報源の活用で問題解決＝技能的定義
- 当初は企業・官庁向けの「手段としてのリテラシー」
- 1980年代～：学習を支えるメタ能力として拡張
- ALA(1989)：必要性の認識→探索→評価→活用の古典的定義
- 方向① 技能→概念：権威性・構築性を理解する認識論的転換
- 方向② 個人→社会实践：知の共創・共有としてのリテラシー
- 方向③ メディア統合：デジタル環境でMILへ融合

17

17

6.2 UNESCOにおけるメディア情報リテラシー（MIL）の構築

- UNESCO：リテラシーを「デジタル社会の基本的人権」に位置づけ
- 2011『MIL Curriculum for Teachers』で学際的統合
- 中核：Access/Evaluate/Createの3モジュール
- ①環境理解 ②信頼性判断の批判的思考 ③倫理的再発信
- ICTスキル超え：社会的知のエコシステムとして設計
- 2021改訂『Think Critically, Click Wisely!』でAI・倫理に対応
- 司書＝批判的情報利用の教育者／信頼できる生態系の専門職

18

18

6.3 IFLA：生涯学習のための情報リテラシー・ガイドライン

- 2006ガイドライン：ILを生涯学習の基礎能力に位置づけ
- 利用者教育の国際指針（学校・公共・大学で活用）
- 定義：探す→評価→活用→創造の循環プロセス
- 読書の「読む—考える—まとめる—表現」と同型の構造
- 図書館員＝情報提供者から学びのファシリテーターへ
- 図書館＝知識伝達機関→学習共同体の中核へ進化

19

19

6.4 ACRL：高等教育のための情報リテラシー・フレームワーク

- 2015：閾値概念に基づきILを再構築（6フレーム）
- 1 権威は構築され文脈依存／2 情報創造はプロセス／3 情報には価値／4 研究は探究／5 学問は対話／6 検索は戦略的探究
- 知識の形成プロセスを学ぶ認識論的リテラシーへ
- 評価：成果測定より学習者の変容を重視
- 児童生徒段階にも応用可能な枠組み

20

20

6.5 OECD PISA：読解力概念の変容

- PISA2018：デジタル時代の読解を再定義
- 複数テキスト統合＋信頼性評価＋出典評価を測定
- 証拠に基づく解釈の統合を重視
- 読書教育＝情報リテラシー教育へ橋渡しする要点
- 図書館の読書活動をPISA型読解育成の基盤として再評価

21

21

6.6 概念統合：読書教育×情報リテラシー教育の橋渡し

- ILは「技能・概念・価値・社会实践」の四層構造
- 読書タスクに四層を埋め込み、往還学習を設計

情報リテラシーの層	読書教育の対応要素	主な教育効果
技能 (Access)	書誌的探索・OPAC利用	情報検索・分類能力
概念 (Evaluate)	批判的読解・出典確認	真偽判断・根拠理解
価値 (Use)	意見形成・要約・引用	論理構築・情報倫理
社会实践 (Create)	読書感想・共同発表	表現・共有・対話

22

22

7 国内動向：文部科学省の政策と図書館の役割

7.1 日本における情報リテラシー政策の形成過程

- 1990年代後半：教育の情報化でILが政策に登場（ICT活用中心）
- 2000年代：技術習得→評価・選択・活用の力へ重心移動
- 2008/2017学習指導要領：制度的に方向づけ
- 2017告示：情報活用能力＝全教科横断の学習基盤
- 定義：課題解決に必要な情報を収集・判断・表現・活用する力
- UNESCOのMIL (Access/Evaluate/Create) と対応・整合
- 2019文科省資料：学びに向かう力・言語能力・情報活用能力の3柱
- 思考・判断・表現と“情報の信頼性判断”を明記（読書教育と接続）

23

23

7.2 GIGAスクール構想と情報活用能力の実装

- 2020～：1人1台端末＋校内ネットワークを整備
- 電子図書館・DB・動画等へ直接アクセス可能に
- 同時に：信頼性評価・引用・再構成の力が必須に
- GIGAは必要性を技術的に“可視化”→理念基盤は未整備
- 課題：批判的読解・情報倫理・表現の責任の育成
- 図書館＝紙×デジタル×DBを横断接続する“航海図”を提供
- 司書/教員：読書（比較・検証）とデジタル学習を結び意味づけ
- 探索→検証→表現の学習動線を図書館が設計支援

24

24

7.3 読書教育の政策展開と図書館の役割

- 2001以降：読書活動推進基本計画を5次にわたり策定
- 第五次（2023-2027）：読書＝情報化社会の基礎的リテラシー
- 読書活動＝情報を主体的に収集・判断し学びに生かす営み
- ICTを活用した読書支援を推奨（電子/紙の併用）
- 公共図書館・学校図書館・家庭の連携を強調
- 地域ぐるみの読書環境整備を目的化
- 読書＝情操に留めず、情報活用の実践教育へ拡張
- 図書館＝社会的ラーニングスペースとして再定義

25

25

7.4 学校図書館と公共図書館の協働体制

- 2014学校図書館法改正：学校司書の法的位置づけを明確化
- 教員・司書教諭・学校司書の連携で探究・調べ学習を体系化
- 公共図書館：調べ学習・読書支援で学校と協働を拡大
- 支援センター設置・ブックリスト連携等の後方支援
- 公共図書館は地域資料・新聞・学術DB・統計を提供
- 幅広い利用者対応を通じ多様性・対話性を体現
- “異質性の共存する場”としてIL深化に資する
- 学校図書館×公共図書館の役割分担と連携を継続強化

26

26

7.5 図書館基盤のIL教育：課題と展望

- 課題① 制度接続の脆弱性：教育/文化行政の縦割り・地域差
- 課題② 評価の不在：全国指標がなく成果可視化が難しい
→ PISA読解・Civic Online Reasoning等の評価モデル応用
- 課題③ 人的資源不足：児童担当司書の専門性・数の不足
→ educational librarianshipの確立が急務（IFLA/UNESCO）
- 対応：地域レベルの実証研究で効果・手法を可視化
- 対象例：小牧市立図書館「sagasokka」による具体的検証
- 読書行動・検索行動・評価行動のデータ化と分析が鍵

27

27

8 認知バイアスについて

8.1 概念

- **定義**：日常的な意思決定や判断において、無意識に影響を与える心理的な偏り。
- **原因**：脳が効率的に情報処理を行うために利用する簡略化（ヒューリスティック）
- **影響**：情報の選択、解釈、評価に影響を与え、誤った判断や意思決定を招く。

28

28

8.2 認知バイアスの種類

- **確認バイアス**：自分の信念を支持する情報ばかりを探し、反証となる情報を無視する傾向。
- **チェリー・ピッキング**：都合の良い証拠だけを提示し、不都合な情報を無視する行為。
- **スリーパー効果**：信頼性の低い情報源から得た情報でも、時間の経過とともに信じてしまう現象。
- **感情移入ギャップ**：冷静な状態の人は、興奮状態の人の気持ちを想像することが難しい現象。
- **身元のわかる犠牲者効果**：特定の個人や団体に対する共感度合いが、不特定多数の場合よりも高くなる現象。
- **ステレオタイプ**：特定の集団に対する固定観念や偏見。

29

29

8.3 情報学的アプローチ：エコーチェンバーとフィルターバブル

- **エコーチェンバー**：自分と似た意見を持つ人たちと繋がることで、自分の意見が正しいと錯覚してしまう状況。
- **フィルターバブル**：アルゴリズムによって、自分が見たい情報だけが表示されるようになり、視野が狭まってしまう状況。
- **集団極性化**：エコーチェンバーとフィルターバブルによって、集団内で意見が先鋭化し、対立が激化する現象。

30

30

8.4 ステレオタイプと認知バイアス

- ステレオタイプは、認知バイアスの一種
- 特定の集団に対する固定観念や偏見を指す。
- 代表性バイアスや確証バイアスと密接に関連
- 一度形成されると強化されやすい傾向があります。
- 思考を単純化
- 誤った固定観念や価値観を植え付ける可能性
- ステレオタイプに基づく差別や偏見は批判されるべき
- 情報を正しく読み取り、グローバルでフラットな思考や価値観を持つことが重要

31

31

8.5 認知バイアスの影響を理解する重要性

- 認知バイアスの存在を理解し、その影響を意識すること
- バイアスは、情報の取得から意思決定に至るまでのすべてのプロセスに影響を与える
- 利用者が自分自身のバイアスに気づき、それを修正する能力を養う
- アルゴリズムによって情報が個別化されているため、バイアスに対する対策がますます重要

32

32

8.6 認知バイアスを克服するために

- **メタ認知:** 自分自身の思考過程を客観的に観察し、バイアスの影響を受けている可能性に気づく。
- **批判的思考:** 情報源の信頼性や情報の客観性を評価する能力、論理的な思考力を養う。
- **多様な情報源へのアクセス:** 様々な立場や視点からの情報に触れる機会を増やし、偏った情報収集を防ぐ。

33

33

8.7 公共図書館における情報リテラシー教育

- **情報リテラシーの定義:** 情報を適切に検索し、評価し、批判的に活用できる能力。
- **公共図書館の役割:** 情報リテラシー教育を通じて、利用者の認知バイアスへの対抗能力を育成。
- **具体的な取り組み:**
 - バイアスに関する知識の提供
 - 批判的思考スキルの育成
 - 多様な情報源へのアクセス提供
 - メタ認知の促進

34

34

8.8 公共図書館における情報リテラシー教育の事例①

- **シカゴ公共図書館「YOUmedia」:** 青少年向けのデジタル学習スペース。情報リテラシーや創造性を育むプログラムを提供。



35

35

8.8 公共図書館における情報リテラシー教育の事例②

- **ニューヨーク公共図書館「TechConnect Classes」:** 成人向けのデジタルリテラシープログラム。技術スキルの向上と情報リテラシー教育を提供。



36

36

第3分科会 子どもの読書活動

「へなそうるの森から くらしと物語」

講師：^{わたなべ}渡辺 ^{てつた}鉄太氏（児童文学者・翻訳家）

オーストラリア在住で、絵本を中心とした執筆活動のかたわら「メルボルンこども文庫」を主宰されている渡辺鉄太氏に、子どもと読書についての講演をいただいた。

父（渡辺茂男氏）の著書である『もりのへなそうる』という物語の中の「もり」は、父によると「多摩の雑木林がモデル」ということだが、私にとっては3歳



まで住んでいた西東京市の家の近所にあった植木屋さんの庭である。『もりのへなそうる』を読む子ども達は、それぞれに自分の知っている雑木林を思い浮かべて物語を体験するだろう。父は「5歳以前の子ども時代をへなそうるの時代」と言っており、「そういう時代は二度とこない」と話していた。子ども時代の記憶には、五感が結びついている。五感は人間の本能と直結しているものなので、そういう感覚が刺激されるような出来事と記憶と物語は関係が深い。

「メルボルンこども文庫」を20年近く開催しており、最盛期には30家族ほどが集まっていた。コロナ禍以降は活動が中断されているが、文庫を始めて3年位で多くの参加者が集まり、日本語の文学や絵本に飢えている人が多くいると感じた。文庫は月に一度活動しており、本を読んだりおはなしをしたりするほか、人形劇・七夕・月見・書初め・絵馬作り・節分の豆まき等様々な活動をしていた。日本語の読み書きを覚えるだけでは「お勉強」というイメージが強いため、文庫では色々なことを幅広くやろうという思いがあった。また、日本語に翻訳された他の言語の物語や作品に触れることも大切にしていた。

ある時、餅つきをやりたくて、電動工具でうすを作った。日本の絵本で餅つきの場面が出てくることがあるが、実際にやってみると、よりその世界がわかり現実感を持つことができる。物語は本やおはなしの中だけではなく、外の世界とつながっている。本を書く人、絵本を作る人、おはなしをする人は、たとえその話がフィクションであっても具体的な場所を思い浮かべているはずである。物語はどこかで生まれるもの、誰かが生むものであり、必ず最初はその場所や環境に根差したものである。子どもの本の場合には特に感覚が大切で、それがきちんと育まれないと色々なことが分かるようにはならない。このため自然の中での文庫活動を通じて、おはなしの世界と現実の環境は関係があるということを伝えたかった。

私にとって物語は、ふるさとそのものという感じがする。くらしの中に物語があるかもしれないが、逆に私たちが物語の中にくらしているともいえる。